

レギ―博士の憶出

世界の學界の哀悼を後にして、レギ―博士の永眠せられたのは、早くも三月餘りの過去となつた。今は既に時機を失した嫌があるが、編輯子の切望にまかせ、一二博士に係る自分の憶出を記して追慕の情を表したい。

初めて博士に逢うたのは、自分の歐洲遊歴日誌「西航記」を繰ると、大正九年（一九二〇）十一月十九日の夜であつた。當時巴里に滞在して毎日敦煌文書の研究に従事して居つた自分は、この夜ペリオ教授をポルト・マイヨ―近くの日本人倶楽部Ⅱというても天井の低い木造の如何にもお粗末な借家であつたがⅡに招いて、日本料理を馳走することになつて居た。それを同宿の大住嘯風君が知つて、丁度好い時だから、レギ―博士御夫婦をも招き更にオートゼチュ―ドのウルセル教授、名譽領事のシュバリエ氏をも招待し、それに丁度この頃巴里に逗留して居られた藤代教授と、佛語の達者な船橋君（現名古屋醫大講師）にも出て貰つて、歡談の機會を作らうではないかといふので、遂にその通りに運ぶことになつた。倫敦から巴里に移つた自分は、既に二ヶ月許りを巴里に過したのであつたが、多くはビブリオテーク・ナショナルとかミュージー・ギメーなどの陰氣な部屋の中や、ペリオ、ハツカン諸氏などの往來に費し、自からも希望し友人からも誘はれながら、まだ博士を訪問することを怠つて居つたので、この夜初めてあの白髮童顔の溫容に接したのであつた。少しの隔てもなく飾り氣もなく、極めて氣輕に愛想好